

中央公民館だより

令和元年6月1日発行

三原市中央公民館

三原市円一町2丁目3番1号

TEL 0848-64-2137 FAX 64-0137

生涯学習課 新庁舎へ移転

これまで中央公民館に事務室を構えておりました生涯学習課は、三原市役所新庁舎の竣工に伴い、5月7日より6階の“教育委員会”フロアに移転いたしました。(②番の窓口)

生涯学習に関するお問合せ・ご相談は、下記担当までご連絡ください。

なお、中央公民館の講座の運営や内容に関することは、これまでどおり中央公民館へ直接お問合せください。引き続きよろしくお願いたします。

☆生涯学習に関するお問合せは下記へ

○課長……………0848-67-6146

○企画振興係…0848-67-6147

(青少年健全育成、少年少女海外研修、宇根山天文台・家族旅行村、老人大学、放課後子ども教室、成人式、ふるさと子ども博士講座、親善都市交流、青年の家等に関すること)

○学習施設係…0848-67-6148

(各公民館・コミュニティセンター・さざなみ学校・図書館等の管理運営、国際交流サロン事業、まちづくり出前講座、地域コミュニティ助成事業、若者居場所づくり事業等に関すること)

○中央公民館…0848-64-2137

(主催・自主講座に関する問合せ・相談、部屋の予約等)



三原市役所新庁舎



生涯学習課の移転した6階“教育委員会”フロア

自主グループ突撃インタビュー No.1 ～みはらアーカイブスの巻～ 古谷巖さんのシベリア絵画、長野県阿智村へ

みはらアーカイブスは、三原の文化を発掘・発信している団体です。このたび和田在住の古谷巖さん(93歳)からシベリア絵画を譲り受け、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館で今秋企画展を開催する運びとなりました。

この記念館は、中国残留日本人孤児の肉親探しの先駆けを担った山本慈照住職ゆかりの土地に、苦難の歴史を伝え平和を希求するために、2013年に建設されました。2015年アーカイブスのメンバーが同記念館を訪ねたことをきっかけに交流が始まり、去る5月23日に絵画12点を自家用車で運んだそうです。

古谷さんは、1941年15歳で満蒙開拓青少年義勇軍に応募。茨城県内原訓練所で2カ月の教育訓練を受けた後、満州(中国東北部)へ渡り、1944年2月には3年間の実習訓練を終え、虎林の開拓団へ配属されたとのこと。しかし、翌1945年5月には関東軍に召集され、8月ソ連の侵攻、敗戦。9月にはソ連ビースク収容所へ移送され抑留生活を送るが、1947年5月に舞鶴港に帰還しました。

1985年60歳退職後に中央公民館絵画教室で絵を学び、義勇軍・シベリア体験を描いてきました。1992年に公民館ロビーで開催された「私のシベリア回顧展」は大きな反響を呼びました。その後も描き続け、行政や画廊からの依頼で絵画展を開催し、戦争体験を今に伝えています。

その古谷さんの真摯な姿に寄り添うように、みはらアーカイブスの活動が今日も続けられています。



☆皆さん、踏んでますよ! お宝を!!

えーっ、こんなところに…
“キラリと光る三原のお宝!!”
見直し隊④

意外なところに意外なお宝があるものです。皆さん、普段何気なく通行されている街路の足元に視線を落としてみてください。何が目の中に飛び込んでくるでしょうか。

マンホールのふた? そうです。このふたにデザインされたやっさ踊りの図柄。実は戦後、祖母の郷里三原に移り住み(本町)、生活に密着した芸術性豊かな作品を生涯制作し続けた型染作家 内田皓夫(てるお)によるものです。

内田皓夫(1920-2000年)は、民芸運動の創始者 柳宗悦、人間国宝 芹沢銈介に学び、県民芸協会会長も務め、工芸の発展に寄与、多くのファンに愛されました。



マンホールのふたにデザインされたやっさ踊り

今年も南小緑化委員が花壇にパンジーを!!



地域連携活動

南小学校緑化委員会
による花の移植作業



去る4月11日(木)、南小学校緑化委員の児童の皆さんに恒例の花の植え付けをしていただきました。地域連携活動の一環としてすっかり定着しました。今年で4年目を迎えます。

場所は、中央公民館並木通り沿いの花壇(駐車場前)。同校で丹精込めて栽培されたパンジー約60株が次々に運び込まれました。児童たちは、最初に仮置きをしてみて、配置を考えながら各自移植ごてで手際よく植え込んでいきました。

それまで花卉の乏しかった冬季の花壇は、あっという間に豊かな色彩で埋め尽くされ、色鮮やかな大輪の花弁が道行く人の目を楽しませてくれていました。

正に感謝の一語です。

編集後記 趣の異なる“裏高山”

三原城跡とともに国史跡に指定されている二つの高山。2年前の2017年4月6日(城の日)には、新高山城が三原城とともに財団法人日本城郭協会より「続日本100名城」に選定されています。

“裏高山”という呼称があるわけではありません。一般的には、本郷方面から眺めた山体(写真上)がよく紹介されますが、船木に生まれ育った者にとっては、下の写真の形状が馴染み深いものです。

本郷側から見れば、高山はメロンパン、新高山はひとこぶラクダ。船木側から見れば、高山はふたこぶラクダ、新高山は屋島(香川県)。一変します。

“裏高山”も四季折々の情趣が感じられます。この時期、水田には一面水が張られ、あたかも湖水に浮かぶ島のようなです。また、急峻な両山塊の谷間の部分には、竜王山辺りでしょうか、両山に酷似した三原の山々が遠望できます。

機会がありましたら、趣の異なる“裏高山”を是非ご観賞ください。



本郷側から見た両高山(右:高山、左:新高山)



船木側から見た両高山(右:新高山、左:高山)